

論文概要

Bangladesh 女性の婚姻観からみる児童婚の促進要因

- オンラインの聞き取り調査を中心とする一考察 -

16MDO133 中埜静香

【研究の目的と方法】

本論文の目的は、Bangladesh の主に農村部に居住する女性の婚姻の実態と、既婚女性の婚姻に対する考え方、なかでも児童婚への考え方と実際の状況の一端を整理し、その要因を考察することである。また、Bangladesh の農村部の実情把握を主たる目的としつつも、そこで垣間見られた状況が果して農村部に限る実態であるのかを確認するために、事例調査対象地域の都市部と農村部それぞれの実情を把握することによって、農村部の特徴をより理解することである。

従来 Bangladesh の女性は、強固な家父長制に基づく世帯内の役割と、女性の外部との接触に制約を与える規範としてのパルダの影響により行動範囲が限定され、社会経済的な活動へ従事することに制約を受けてきた。これを受けて、女性や女兒の社会経済指標を改善するため、Bangladesh の開発における女性政策にも焦点が当てられ、就学率、出生率、妊産婦死亡率、平均寿命、児童婚などにおいて社会指標の改善が見られた。また、児童婚についても減少傾向にあるものの、未だに世界で児童婚が最も多いワースト 4 位として Bangladesh が挙げられている。そして、近年のコロナ禍の影響により女兒の児童婚は増加の懸念があると報告されている。児童婚の習慣の背景には、これまでも複雑な社会経済的状況や文化的要因が相互に関連し合っていることが論じられてきた。

まず、児童婚がどのような理由や経緯で行われるのかを探るために、まず文献研究では、児童婚がどのように語られているかを先行研究から概観し、また事例調査の枠組みを検討すべく、南アジアおよび Bangladesh 全般における女性を取り巻く社会環境や立場、イスラームの圏の婚姻観について文献から特徴づけ、課題を抽出した。次に、現地調査としてオンラインのインタビューを実施した。対象地域は、筆者がかつて滞在していた北西部に位置するタンガイル県ショドール郡の都市部と農村部である。聞き取り調査は、コンタクトパーソンである農村開発官の女性 N 氏をはじめ、筆者の滞在時に知り合った知人やその家族を通じて、同地に居住する複数世代の既婚女性へ現地語で聞き取りを行った。聞き取りの進め方としては、事前にいくつかの質問を用意するが、実際には個々の回答に合わせて柔軟かつ具体的に女性の価値観や生き様を聞き取るべく、半構造的なインタビューとした。そして、オンラインでの聞き取り調査を通じて、児童婚の実態をはじめ女性たちの婚姻観や個々の婚姻後の生き様の一端を明らかにすることを試みた。

【論文構成】

第1章 序章

- 第1節 研究の背景と問題の所在
- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の方法
- 第4節 論文の構成

第2章 南アジア女性をとりまくジェンダー課題

- 第1節 国際社会のジェンダー平等推進の流れ
- 第2節 ジェンダー課題としての児童婚
- 第3節 信仰と婚姻観
- 第4節 小括

第3章 バングラデシュ開発政策と農村

- 第1節 バングラデシュ概要と農村社会
- 第2節 バングラデシュにおける婚姻観と実態
- 第3節 小括

第4章 タンガイル県ショドール郡在住女性を対象としたオンラインでの実態調査

- 第1節 調査の概要
- 第2節 聞き取り調査の結果
- 第3節 小括

第5章 全体考察

- 第1節 信仰や社会的背景からみた婚姻観
- 第2節 女性の安全と両親の思い
- 第3節 先行文献とインタビュー調査の比較
- 第4節 女性の就業機会と児童婚の関係

第6章 結論

【論文の概要】

本論分は6つの章で構成されている。第1章では、バングラデシュの農村部での筆者の体験に基づく問題意識を述べ、研究の目的、方法、全体像を明確にした。

第2章では、既往の文献、先行研究、統計データを参照しながら、国際社会におけるジェンダー課題と、イスラーム圏の結婚観を整理し、イスラーム法では婚姻年齢の規定がなく、児童婚が容認されていることを確認した。さらに、児童婚は世界的に減少傾向にあったが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響に伴い増加が懸念される状況であることが分かった。特に南アジアでは、男性を優遇する文化的特徴を持っており、意思決定力も経済支配力も男性の手に委ねられているため、女性は劣位に置かれやすく、女性の経済的自立や教育は優先されずに、婚姻することが望ましいとされてきた社会背景があることが明らかになった。

第3章では、先行研究の議論から、近年バングラデシュの女性に関する社会経済指標の改善による男女格差の解消にも関わらず、女性に対する様々な暴力や、バルダ規範による女性の行動規制により、主要な経済収入は男性が得ており、女性の就業機会が限定的であり、婚姻関係の維持の重要性がより強く感じられていることが分かった。そのため、女性が男性の保護を失うと、経済的また社会的地位の下落が潜んでおり、女性が一人で生きていくには相当困難な社会である状況を垣間見ることができた。

第4章では、第2章と第3章での議論を踏まえ、バングラデシュのタンガイル県ショドール郡に暮らす既婚女性たちを対象に実施した、婚姻観や婚姻後の生活についての聞き取り調査の概要と結果を示した。回答からは、例外なく婚姻相手は親が決め、当事者も自身の子どもにそれを望んでいることが確認できた。また、婚姻することは女性の社会保障であり、同時に女性が受けるセクシャルハラスメントからの安全を保障するものであると認識されていることが分かった。このため、例えば実質的に結婚生活が破綻しているような事例でも、離婚することで「理想的な女性ではない」などとレッテルを貼られ、その負の影響が当事者女性はじめ娘の結婚にまで及ぶため、離婚はしたくないと考えている事が分かった。その他の回答では、職を得ていない女性はみな「就職がしたい、仕事がしたい」と考えていることが示された。

第5章では、第4章で得られた回答から、特徴的な行動や考え方とこれまでの議論を踏まえ、現地の婚姻観を特徴づけ、児童婚が行われる背景や要因を考察した。先行文献で特徴づけた通り、イスラームの婚姻観とバングラデシュの慣習によるジェンダー秩序に対する考え方が、女性たちの婚姻観の前提と考えられていることが分かった。例えば、女性は男性の庇護を失うと様々なリスクが伴うため、両親は娘の安全と幸せを願いながら、より良い条件の婚姻相手を選ぶことが、親としての義務や責任と考えており、娘の側も「まだ、結婚はしたくない」と考えながらもそれに応えようとしていることが伺えた。それらの考え方は、女の子に対するセクシャルハラスメントや性的暴力により貞操が失われると、姦通が禁じ

られているイスラーム法に反することに起因していると考えられる。さらに、パルダの尊守が女性の属する家族の社会的評価に結びつくため、社会的に脆弱な独身の娘の身を守るために比較的早い年齢で親主導の婚姻が行われている事が考えられる。

その他の児童婚が行われる要因の一つとして、女性の教育水準などが上昇しても、社会的に多くの資源や機会を持たずに、特に、教育と職業との接続が相成らないことが分かった。様々な階級の女性が入りこめる就業機会や、能力を活かせる自己実現の場所と、安全は環境の整備が必要であると考えられる。

第6章では、結論を示した。以上に述べてきた通り、イスラームの婚姻観とバングラデシュ農村部の常識的な考え方や行動規範が、女性の行動や意思決定に影響していることが明らかになった。特に、家父長制の考え方で、「女は男に帰属するもの」といった社会通念が未だに広く残っており、就業を望んでいても就業機会が無く、男性に対して社会経済的な安全を婚姻制度に依存することを余儀なくされている葛藤が明らかになった。それゆえに、同国が今後されに経済・社会発展をしていく中で、広い階層の女性が活躍できる土壌作りに取り組む必要があると考えられる。

残された課題は、COVID-19の感染拡大により本来調査対象者として想定していた、農村部の幅広い年齢層と階層の既婚女性の声を得られなかったことである。結果的に限られた情報源から、実態の一端を描写したに過ぎず、現在どのような変化が生じているのかを概観するには至っていない。この点は今後の課題とする。